

# シンポジウム 緒言

糸長浩司

## シェルターとアジール

母なる地球は、宇宙からの放射能や多角的なエネルギーから生物を守るシェルターとして何億年もかけて創造された。

非、そのような環境の中に、生物が出現し、長い命がつながり人間にいたる。

今、母なる地球の、生物、人間を守るシェルターとしての機能が低減している。人間の余りに傍若無人で無謀な成長拡大信仰が、母なる地球を破壊している。

今、物言わぬ生物は、原発事故の放射能で被曝させられた体をもって、人間に問いかける。

大地に生きることの意味、命をつなぐことの意味と価値を、そして、未来を。命のつながりを歪め、破壊する人間の無謀な力を糾弾する。

放射能被曝させられ大地、生き物からの声を真摯に聞く科学的知が求められる。人間が生態系のカリソメの頂点にいたいとするならば、エコシステムの放射能被曝メカニズムとその回復、修復の術を探求しなければならない。

放射性物質の長い半減期と向き合い、長い時間をかけて、母なる地球の修復と回復の途を、生物と人間の回復の途を、確実に「までえ」に歩まねばならない。

人類は、全ての人間が、祖先と大地を敬い、歴史・文化を継承し、未来の世代に幸せを託すことを信じて、社会的シェルターとして近代的な「国」を創造した。「国」は社会的な国として、人々の命と暮らしを過去－現在－未来と育み、守るシェルターのはずである。非あったというべきか。

無謀な原発災害（原発公害）により被曝した民の逃げる場所（アジール）を「国」、「県」、「村」は十分に用意しようとしなない。村境、県境を超えた、社会的な国の民として、安心した暮らしと未来への希望を描く権利が個人、家族に、仲間・コミュニティにある。真つ当な政治、民主主義、人間主義が問われている。

科学と技術は、地球上の生命、人類の真つ当な命を育み、つないでいくためにある。科学者、技術者は、民とともにある。

難しい局面を一步でも打破し、未来を切り開くための情報交流、知と心の交流の場となることを祈念する。

## 謝 辞

本シンポジウムは、「飯舘村放射能エコロジー研究会」に集う、多くの飯舘村民、市民、研究者のボランティアによって運営されています。また、本研究会の構成員以外からのゲスト研究者や専門家の皆さんの参加もあり、実り多いシンポジウムとなっています。ここに、深く感謝申し上げます。

尚、本シンポジウムの運営費は、下記の研究費から支出されています。

- ①基盤研究(C)「放射能汚染農村における被害実態とコミュニティ再生に関する研究」  
(研究代表者：糸長浩司)
- ②基盤研究(B)「「農」の哲学の構築——学際的な拡がりの中で」(研究代表者：鬼頭秀一)
- ③基盤研究(B)「カザフスタンのセミパラチンスク核 実験場やウラン鉱山地域の被ばく線量評価と健康影響」(研究代表者：星正治、分担：今中哲二)

### 要旨集編集

編集担当 糸長浩司（日本大学、飯舘村放射能エコロジー研究会共同世話人）  
編集協力 菅野 哲（飯舘村民）  
小澤祥司（飯舘村放射能エコロジー研究会共同世話人）  
日本大学生物資源科学部系長研究室